

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2016年8月号

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第6回仙台国際音楽コンクール 【開催日程】ヴァイオリン部門:2016.5.21(土)~6.5(日) ピアノ部門:2016.6.11(土)~6.26(日)

第6回仙台国際音楽コンクールピアノ部門・ファイナリスト6名を聴いて

萩谷 由喜子(音楽評論家)

2001年の創設以来3年周期で開催されている仙台国際音楽コンクールは、数ある国際音楽コンクールのなかでも屈指の協奏曲重視型だ。予備審査と予選の課題曲は独奏曲だが、セミファイナルとファイナルでは協奏曲をプロオーケストラと共演する。しかもファイナルではタイプの異なる2曲が課される。協奏曲3曲を準備することは負担が大きいようだが、セミファイナルにまで残ればプロオーケストラとの共演切符を手にする。若手にとってこれは貴重なチャンス。だから、これを前向きにとらえて、ぜひ勉強に生かして欲しい。主催者側もこのコンセプトを大切に、ますます「協奏曲の仙台」の名を轟かせていただきたい。

さて、今回のピアノ部門の場合、セミファイナルの課題曲はベートーヴェンの3番ハ短調、4番ト長調のどちらか1曲。ファイナルの課題曲のうち1曲はモーツァルトだが、演奏機会の多い後期8作は取れて外され、第15番~第19番というあまり採り上げられない中期作から1曲を選ぶよう指示されていた。もう1曲はロマン派~近代の主要作にベートーヴェンの第5番を加えた16曲の中から選ぶ。実によく考え抜かれた課題で、このことから、審査委員首脳部が優れたピアニスト、ピアノ教育家であることが窺える。ことに、モーツァルトの中期協奏曲は後期著名作への離陸を告げる隠れ名作群で学べるものが多いにもかかわらず、こんな機会でもなければ通常はまず演奏されない。実際、結果発表後の記者会見で、ファイナリストのほぼ全員が今回初めて弾いたと語った。

ファイナリスト6名についてみていこう。選択ピアノは、第2位のエヴァン・ウォンがカワイを選んだほかはすべてスタインウェイである。

第1位のキム・ヒョンジュンは1991年韓国生まれの女性。モーツァルトは第19番へ長調 K459 を選び、過剰表現のない穏当な演奏を聴かせる一方、オーケストラと生き生きとした対話を交わした。ロマン派作品ではブラームスの1番を選んでいたので注目していたところ、彼女の音には張りりと強靭さがありブラームスに向いていた。みずからの特質をよく心得てこの曲を選んだことも実力のうちというもの。作品が弾き手に求める表現に彼女のテンペラメントとテクニックが見事に合致していたのだ。オーケストラ合わせにも経験値が感じられ、それらの要素が彼女を優勝へと導いた。

第2位のエヴァン・ウォンは東洋系男性で1990年生まれ。国籍はアメリカ。モーツァルトの第17番ト長調 K453ではモーツァルト特有の軽快感を表出するにふさわしいタッチを巧みに選択し短調部分では深い陰影も感じさせた。ラフマニノフ



『パガニーニの主題による狂詩曲』は鋭い一撃から開始。アグレッシブな一面をみせた。性格の異なる2曲を課すこのコンクール本選の意義を、彼から顕著に感じ取ることができた。第3位の北端祥人は1988年生まれ。現在ベルリン芸術大学大学院留学中。モーツァルトは第19番へ長調 K459 を選択。6人中もっとも躍動感のあるモーツァルトで、生命力に満ちていた。美音の持ち主。演奏中の体の動きも曲の起伏と一致していて少しも不自然ではない。ショパンの第1番は清潔感のあるまじめな演奏だったが、モーツァルトに比べて攻めに乏しく、もっと冒険してもよいのではないかな。

第4位のシャオユー・リュウは1997年生まれの東洋系男性。国籍はカナダ。強みはタッチの種類を豊富に持っていることで、選択曲にはそれが十全に発揮された。モーツァルトは第19番へ長調 K459 を選択。オーケストラ呈示部を聴く間にイメージをぐんぐんと高め、美しい弱音からソロを開始した。ラフマニノフ『パガニーニの主題による狂詩曲』では全体に有機的なつながりを持たせた点を評価したい。

第5位のシン・ツァンヨンは1994年韓国生まれの男性。モーツァルトは第17番ト長調 K453 を選び、弾力のある演奏を聴かせた。音の粒立ちもよい。ラフマニノフの2番ではオーケストラに埋没しない輝きのある音がよく聴こえた。テクニックのある人なのでそれをどう生かすかが今後の課題だろう。

第6位の坂本彩は1989年生まれ。東京藝大出身で現在ベルリン芸術大学留学中。モーツァルトの第18番変ロ長調 K456 では銜いのない自然体の演奏を聴かせ、ラフマニノフの第2番を真摯な意欲をもって前向きに弾いた。素直な資質を大切にして表現の幅を広げ、よりニュアンスに富んだ演奏を目指して欲しい。

第6回仙台国際音楽コンクールピアノ部門レポート

道下京子(音楽評論家)



雨のしずくに緑がひとときわ映える6月、私は第6回仙台国際音楽コンクールピアノ部門のファイナルと入賞者ガラ・コンサートを聴いた。

これまでのファイナルでは、ピアノ協奏曲の演奏は1曲であったが、今回からピアノ協奏曲を2曲演奏することが課せられた。そのうちの1曲は、モーツァルトのピアノ協奏曲第15番～第19番から1つを選択する。

第1位を獲得したのは、韓国

出身のキム・ヒョンジュン(スタインウェイ)。しっとりとした質感の美しい音の持ち主であるが、その音は管弦楽の響きに埋没することはない。モーツァルト《ピアノ協奏曲 K. 459》を指先の抜群のコントロールで、きめ細やかな表情を描き出し、清楚な表情をふりまく。ブラームス《ピアノ協奏曲 第1番》では、歴然としたタッチで作曲家の若々しい情熱を掻き立てた。作品を一つにまとめ上げるスケールの大きさも示した反面、第2楽章の内声の動きやシンコペーションなどのリズム表出がややストレートであり、楽譜の読みの浅さも感じられた。

第2位のエヴァン・ウォン(カワイ)は、アメリカ出身。モーツァルト《ピアノ協奏曲 K. 453》では、軽快な打鍵でニュアンス豊かに音楽を創り上げ、楽器の特性を活かして内面的な表情を巧みに漂わせていた。ラフマニノフ《パガニーニの主題による狂詩曲》では、音楽に一貫した流れを与え、切れ味のよい音で、生彩に富んだ演奏を披露した。

第3位は、北端祥人(スタインウェイ)。モーツァルト《ピアノ協奏曲 K. 459》については、実に安定した演奏であった。弾力に富んだタッチは心地よい躍動を生み出し、とりわけ屈託のないその表情は、聴く者の心を惹きつけた。抜群の音楽の構成感をもつ北端は、ショパン《ピアノ協奏曲 第1番》も手堅くまとめ上げていたものの、個人的にはもう少し淡い情感も欲しいところ。

筆者が目じたのは、第4位のシャオユー・リュウ(ヤマハ)である。弱冠19歳でありながら、その音楽には気品が備わっており、豊かな将来性を感じさせた。残念だったのは、音のヴォリュームの弱さ!しかし、彼の演奏するラフマニノフ《パガニーニの主題による変奏曲》は、その変奏の一つひとつが、細密画のような美しさを湛え、主題や動機を基に、オケとの対話もしっかりできていた。客観的な眼差しで、音楽をすっきりと描き出したモーツァルト《ピアノ協奏曲 K. 459》。ぬくもりに満ちあふれるその音楽はすぐれてデリケートであり、柔らかなピロードのような美しい音の響きを聴いていると、若き日のダン・タイ・ソンを彷彿とさせる。

第5位は、韓国のシン・ツァンヨン(スタインウェイ)。彼が演奏したのは、ラフマニノフ《ピアノ協奏曲 第2番》とモーツァ

ルト《ピアノ協奏曲 K. 453》。確信に満ちた力強いタッチで、自らの感情を厭わず音楽に注ぎ込む。ドラマティックな表現は魅力的ではあったが、感情が高ぶると、音の濁りや抑制が効かなくなった点は惜まれる。

第6位の坂本彩(スタインウェイ)は、モーツァルト《ピアノ協奏曲 K. 456》とラフマニノフ《ピアノ協奏曲 第2番》を弾いた。一筆で描き出すような音の勢いのある演奏であったが、ミスタッチが散見されたのは残念。

なお、ファイナル最終日の翌日に開かれたガラ・コンサートでは、キム・ヒョンジュンはブラームス《ピアノ協奏曲 第1番》、エヴァン・ウォンはラフマニノフ《パガニーニの主題による変奏曲》、そして北端祥人はモーツァルト《ピアノ協奏曲 K. 459》を披露した。

6人ともに、大半が20代後半であり、落ち着いた演奏を聴かせるピアニストが多かった。また今回は、(国籍はさまざまであるが)ファイナリスト全員がアジア系のピアニスト。近年の国際コンクールでは、仙台のこのコンクールに限らず、出場者のほとんどがアジア系の演奏者が占めており、これは世界的な傾向にある。筆者は前回のコンクールも聴いているが、今回はその時よりも明らかに出場者のレヴェルが向上していた。その要因の一つとして、ファイナルのモーツァルトのピアノ協奏曲にあると思う。指定された5曲は、いずれも演奏される機会があまりない曲であり、演奏技巧にも派手さはない。若いアーティストがヴィルトゥオーソ的な作品をとり上げる傾向にある昨今、シンプルで音符の数が少ない古典派の作品に、じっくりと取り組む真摯な姿勢も必要ではないであろうか。曲の構造や分析、作曲家の精神性に至るまで深く音楽を見つめ、鍛練を積み重ね、演奏家の資質や内面的な成熟を判断するうえで、モーツァルトのこれらの課題曲は最適であったと思う。



**コンクールの演奏を
YouTubeでお楽しみいただけます。**

第6回仙台国際音楽コンクールすべての演奏を9月末まで
YouTube配信も行います。

<http://simc.jp/simc/video/top/>